

「アダム・スミスの価値尺度論」に関連する V.W. ブレイドゥンの所論(1975年)〔Ⅱ〕

——「アダム・スミスの価値尺度論」についての
海外における諸研究(18)：1970年代(その7)——

中 川 栄 治

序

わたくしは、前稿（『「アダム・スミスの価値尺度論」に関連するV.W. ブレイドゥンの所論（1975年）〔Ⅰ〕——『アダム・スミスの価値尺度論』についての海外における諸研究(18)：1970年代（その7）——』『広島経済大学経済研究論集』第11巻第1号，1988年3月）において，もともとは1975年に公表されたV.W. ブレイドゥンの論文（Bladen, V[incent] W. “Command over Labour: A Study in Misinterpretation.” In *Adam Smith: Critical Assessments*. Edited by John Cunningham Wood. 4 vols. London & Canberra: Croom Helm, 1983-1984. Vol. 3 (1983), pp. 363-376 [Source: *Canadian Journal of Economics*, Vol. 8 (No. 4, November-December 1975), pp. 504-519.]）のなかで示されているブレイドゥンの所論の内容の一部を整理する試みをなしたのであるが，本稿はそれにひきつづき，前稿の「序」でも示されているように，前稿で取り扱うことのできなかったそのブレイドゥンの論文における彼の所論の残りの部分の内容を整理しようとするものである。

なお，本稿では上掲書所収のブレイドゥンの上掲論文を取り扱うのであ

るが、本稿においても、前稿におけるのと同様、ブレイドウンのその研究の発表年度の区分についてはもともとそれが論文の形で公表された年度、1975年をとるとともに、上掲書中のブレイドウンのその論文を Bladen [1975] と略記することとする。

V. W. ブレイドウン(1975)——〔Ⅱ〕——

前稿において、われわれは、アダム・スミス (Adam Smith) の議論における「労働にたいする支配力」という概念に関連するブレイドウンの基本的な理解〔前稿のⅠ〕、および、スミスのその概念について従来なされてきたとブレイドウンが考えるいくつかの解釈に関して展開されたブレイドウンの議論〔前稿のⅡ〕をみたのであるが、ブレイドウンは、さらに以下のような議論を展開している。

Ⅲ〔ブレイドウンはさらにつづけて、スミスの議論において「労働にたいする支配力」という概念と密接な関連をもちつつ展開されていると彼がみるところの「真実価格の変化の測定」(生産性の変化の測定) ということに関して、「諸真実価格における諸変化の測定」(**Measurement of Changes in Real Prices**) という表題のもとに、つぎのような内容の所説を展開する。〕

(1. まず、ブレイドウンは、スミスの「真実価格」概念の意味、および、その概念とスミスの議論における主要問題との関連、についてのブレイドウンの認識を再確認する。) :

スミスは、「あらゆる物の真実価格は……それを獲得するための労苦と骨折りである」とする。⁽⁴⁰⁾ これは真実価格 (real price) の定義であって真実価格の因果的説明ではない。そして、スミスは、富の増進——安価さと豊富さの増進——の主要原因は技術改良につれてのそれら諸真実価格の削減である、と考えるのであり、資源配分の改善ということよりもむしろこのことこそがスミスの主要関心事であったのである。だが、スミスの場合、この真実価格はどのようにして測定されるべきものであったのか。⁽⁴¹⁾

(2. ついで、その諸真実価格の削減ということこそがスミスの主要関心事であったとみるとともにスミスの議論では「労働支配力における諸変化」が「諸真実価格における諸変化」についての一指標を提供すると考えられていたとみるブレイドゥンは、諸真実価格自体を測定することにまつわる困難性ということに関連づけつつ、スミスの議論における「労働支配力における諸変化」による「諸真実価格における諸変化」の測定といったことに関して以下のような議論を展開する。) :

① 真実価格の測定にまつわる困難性として以下の三つのものをみてみよう。第一に、労働の質は均一的ではないということである〔異質労働の問題〕。スミス自身もこのことは認めているのではあるが⁽⁴²⁾、この問題自体にたいしては、スミスのいう「市場のかけひきや交渉」といったようなものは真に満足のいく解決を提供するものではない⁽⁴³⁾。だが、もしわれわれが正確な測定といったものを追求することをあきらめて実質的諸変化のおおよその測定ということで我慢するならば、そのときには、労働者たちが平均的労働者たちであると仮定されても、さらに、「真実価格」あるいは労働量は、様々な熟練をもった労働者たちの平均的かせぎ高に従ってウェイトづけられるそれらの労働者たちによって費やされる時間数とみなされても、よいであろう。また、「労働支配力」というものは等質的労働にたいする支配力ではなくて平均的労働にたいする支配力を指す、と考えることもできるのである⁽⁴⁴⁾。

② 第二の困難性は、「労苦と骨折り」——われわれならそれを不効用と呼ぶであろう——を直接的に測定することの不可能性および間接的尺度としての「人時」(‘man-time’, 延べ労働時間)の妥当性に関する疑わしさ、ということである〔不効用の不可測性および間接的尺度としての「人時」の当否〕。スミスはこの問題に真正面から出くわしたのでありまたこの問題に対するスミスの解答はしばしば誤って解釈されてきたのであるが、たとえばスミスはこの問題に対する解答として「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うこ

とができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。」（*W. N.*, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ。）といったことを述べている。さて、もし人が不効用のある正確な尺度を求めているのではなくて、労苦と骨折りにおける諸変化のあるおおよその指標として人時における諸変化を使用することを正当化するための理由を求めているならば、こういったスミスの文言は、大いに意味をなしていることになるのである。⁽⁴⁶⁾

③ 第三の困難性は、特定諸財貨の生産に現在実際に費やされる労働量また過去において実際に費やされた労働量についての記録の欠如ということのなかに存在する。この問題は、直接労働だけを扱うときでさえ確かに困難なものであろう。だがそれにくわえて、当該諸財貨のための原材料を産出した人々の、および当該諸財貨の生産において直接的に働く人々の労働を「促進した短縮する」ために使用される設備を製造した人々の、労働もまた、見積もらなければならないのであり、さらに同様に、その原材料を産出した人々および当該財貨の直接的生産に使用されるその設備を製造した人々の、設備、そういった設備を生産するのに使用された労働もまた、見積もらなければならないのである。〔投下労働量の確定の困難性：直接労働の量の確定だけでも困難であるのに、それにくわえて間接労働の量をも確定しなければならない。〕スミスもこのことを認識していたと思われる。⁽⁴⁶⁾ (a)そしてスミスの場合、労働投入量 (labour input) のタームでの計算書の欠如ということから、彼は、ある間接的な尺度を、というよりはむしろ変化についてのあるおおよその指標を、捜し求めたのであり、彼が「労働支配力」というものを利用したのは、そのような指標としてなのである。⁽⁴⁷⁾ (b)なお、変化する労働支配力というものが諸変化の一つの有用なおおよその指標を提供するということは可能なことである。しかし、諸賃金率についての十分な史的統計の欠如のために労働支配力〔およびその諸変化〕を確定することが困難であるということに直面してスミスは、

諸財貨の穀物価格での諸変化があるかなり近い近似値を提供するのである、と主張した。たしかにスミスのこの主張は妥当なものではない。⁽⁴⁸⁾だが、たとえ諸真実価格についての一指標として穀物を使用するということは退けられるとしても、彼の目的は何であったかを理解すべく『国富論』第1篇第11章を読むにさいしてはそれは重要なものでありつづけるのである。すなわち、スミスはわれわれの言う意味での貨幣の購買力の変化といったものを研究していたわけでも、諸指数のウエイトづけということに関するこんにちのわれわれの諸問題を取り扱っていたわけでもなく、彼は、労働支配力における、あるいは、あいにくのことであるが穀物支配力における、諸変化に反映されるものとしての諸真実価格における諸変化といったものを、研究していたのである。⁽⁴⁹⁾

IV「スミスの議論における「諸真実価格における諸変化の測定」ということに関して以上のような議論を展開したブレイドウンはさらに、そのような真実価格の変化の測定という問題はある所与の時点での市場における均衡的な価値の決定についての説明という問題とは別個のものであり、またスミスもそれらの問題に対して別個な取り扱いをしているにもかかわらず、こういった問題についてのスミスの議論をそのようにとらえない解釈も存在してきたし、また、「労働説 (the labour theory)」という言葉の意味の理解についても混乱が存在してきた、とみて、「真実価格と自然価値」(Real Price and Natural Value) という表題のもとに、つぎのような議論を展開する。]

① ジイド (C. Gide) とリスト (C. Rist) の共著では、スミスの議論における「真実価格」の問題と「自然価格」、自然価値の問題とは同一の問題としてとらえられている。⁽⁵⁰⁾しかしそれらは同一の問題ではなかったのである。⁽⁵¹⁾真実価格についてのスミスの議論は、史的な問題すなわち諸事物がヨリ安価になってきたかどうか、つまり、「手に入れるのが」ヨリ容易になってきたかどうかといった史的な問題を、取り扱っていたのであり、そして自然価値 (natural value) についての議論では彼は、供給がみずからを有

効需要に適合させているといったある所与の時点での市場における諸均衡価格を、均衡および配分を、取り扱っていたのである。⁽⁵²⁾

② また、ミーク (R. L. Meek) は、多くの経済思想史家がスミスは実際には労働説を拒否したのだと断定した (「人はいくらか気楽に、そうではないかと思う」) というのを、指摘した。⁽⁵³⁾ スミスは狩猟民族という単純なモデル以外については、〔それらの経済思想史家が言う意味での〕労働説を、拒否したのである。⁽⁵⁴⁾ ところで、ミークはまた、「そのように主張するのは、労働説を誤解するものである……、とわたくしは信じる」と言う。⁽⁵⁵⁾ だがミークがそのように言うとき、そのときには、彼は、それらの経済思想史家が労働説という言葉によって意味していることを誤解しているのである。彼らは労働説という言葉によって、ある所与の時点での市場における長期的あるいは均衡的諸価値の決定についての一説明ということを行っているのである。なお、ミークは他方でさらにつづけて、「労働説とは本質において、生産の領域で人々が相互にむすぶ基本的諸関係が交換の領域において彼らが入る諸関係を究極的に決定するという考えの表現である。マルクスが……『原理的には、生産物の交換があるのではなく、生産において協働した労働の交換があるのだ……』と述べたように。」と、言っている。⁽⁵⁶⁾ もしこれが「労働説」ということによって意味されることであるならば、そのときにはもちろん、すべての古典派経済学者は労働説論者であったということになる。そしてまた事実、この脈絡においてのみ、彼らは理解されることができるのである。⁽⁵⁷⁾

(注)

- (40) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited...by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library (New York: Random House, 1937)——以下、W. N. と略記する——, p. 30 (大河内一男監訳『国富論』〈全3巻〉, 中央公論社, 1976年——以下、大河内訳と略記する, ただし、本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない, また、本稿で取り扱われるすでに邦訳の出版されている他の文献から

の引用文の訳についても同様——, <I>, 52ページ)を参照せよ。

(41) Bladen [1975], p. 371.

(42) ブレイドゥンはつぎのようなスミスの文言を引用している。「1時間の辛い作業におけるほうが、2時間のやさしい仕事におけるよりも、いっそう多くの労働があるかもしれない。また、習得するのに10年〔の労働が〕かかる職業に1時間はげむばあいのほうが、平凡なわかりきった業務で1ヶ月働くばあいよりもいっそう多くの労働があるかもしれない。」(W. N., p. 31. 大河内訳 <I>, 55ページ。〔 〕内はブレイドゥンがスミスの原文を引用するにさいして抜かしている箇所。) Bladen [1975], p. 371.

(43) ブレイドゥンによれば、スミスのいう「市場のかけひきや交渉」も、リカードウ (D. Ricardo) のいう「すべての実際の目的のためには十分な正確さ」を伴う「市場における調整」も、さらに、熟練労働はただ、強められた (intensified) もしくは倍化された単純労働とみなされそしてその強化もしくは倍化の程度は、「生産者たちのずっと背後にある一つの社会的過程によって確定され、したがってまた慣習によって定められるもののように思われる」というマルクス (K. Marx) の説明も、この問題にたいする真に満足のいく解決を提供するものではない、とされる。Bladen [1975], pp. 371-372. W. N., p. 31 (大河内訳 <I>, 55ページ), David Ricardo, *Principles of Political Economy and Taxation*, edited, with Introductory Essay, Notes and Appendices, by E. C. K. Gonner (London: G. Bell & Sons, 1927)——以下, Ricardo, *Principles* [Gonner ed.] と略記する, ただし, ブレイドゥン自身はゴンナー (E. C. K. Gonner) 編のもとの1891年のものを使用している——, p. 15 [David Ricardo, *The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. Piero Sraffa, vol. 1: *On the Principles of Political Economy and Taxation* (Cambridge: Cambridge University Press, 1951)——以下, Ricardo, *Principles* [Sraffa ed.] と略記する——, p. 20 (P. スラッファ編『デイヴィッド・リカードウ全集』第1巻: 堀 経夫訳『経済学および課税の原理』<雄松堂書店, 1972年>, 23ページ), Karl Marx, *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*, hrsg. Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, 3Bde. (Berlin: Dietz Verlag, 1974-1975), Bd. 1 (1974), S. 59 [カール・マルクス著, マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳 (大内兵衛, 細川嘉六監訳)『資本論』(全5分冊) (大月書店, 1978年<第26刷><第1刷 1968年>), 第1巻第1分冊, 60ページ, Karl Marx, *Capital: A Critique of Political Economy*, trans. Samuel Moore and Edward Aveling and ed. Frederick Engels, 3 vols. (Moscow: Progress Publishers, 1954-1959), vol. 1 (1954), pp. 51-52] を参照せよ。

(44) Bladen [1975], pp. 371-372. なお, このような観点からブレイドゥンは, 本稿注43でみた実際の目的のためには十分な正確さといったことへのリカードウの言

及自体は意味をなしているとしている。Bladen [1975], p. 372.

- (45) Bladen [1975], p. 372. なおブレイドゥンは、いま本文で引用されたスミスの文章を追いかけるような形で『国富論』において示されているスミスの文章すなわち「彼が支払う代価 (price) は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働は、より大きな分量のこれらの財貨を購入することもあれば、より小さい分量のこれらの財貨を購入することもある。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購入する労働の価値ではないのである。」(W. N., p. 33. 大河内訳〈I〉, 57-58ページ。)という文章が誤った解釈へと導いてきた、として、つぎのような説明をくわえている。すなわち、ここではスミスは価値 (value) という言葉を「真実価格」と「不効用」という二つの異なった意味で用いているのであり、うへの引用文中の「変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購入する労働の価値ではないのである」という箇所は「変動するのは、それらの財貨の価値 (正確に言えば、真実価格) であって、それらを購入する労働の価値 (正確に言えば、不効用) ではないのである」と読み取られるべきものなのである。このように、スミスは用語をルーズに使用しているのであり、またその点でスミスをとがめてもよいのであるが、他面で、スミスがたとえば価値という用語を一貫した意味内容を指すものとして使用したその指すものはわれわれがその用語によって指す意味内容と同じものであると考えることによって、スミスが言おうとしていることを理解しそこなってはならない。このことは、たとえばサミュエル・ベイリー (Samuel Bailey) のマルサス (T. R. Malthus) に対するまた間接的にはスミスに対する非難にもあてはまるのであり [(Samuel Bailey), *A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value: Chiefly in Reference to the Writings of Mr. Ricardo and His Followers* (London: R. Hunter, 1825; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1967), p. 25 (鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判——価値の性質、尺度、及び原因に関する論文——』〈日本評論社, 1941年〉, 21-22ページ)を参照せよ。], その非難は、マルサスが価値という言葉を正確に使用したと想定されるときにのみ、正当化されうるのであるが、さらにまたたとえばリカードは「労働の価値も等しく可変的ではないのか? というのは、それは、……供給と需要との割合によって影響されるばかりでなく、食物……の価格の変動によっても影響されるからである……」と述べている (Ricardo, *Principles* [Gonner ed.], p. 10. *Principles* [Sraffa ed.], p. 15. 邦訳, 17ページ。)。ここでは価値は、明らかに、賃金を意味しており、また、スミスもきっと、リカードがそこで言っていることに対して異存はないことであろう。リカードはあとのほうでさらに、もし「諸改良が労働者のいっさいの消費対象におよべ」ば、「おそらくは、数年もたたないうちに、彼は、たとえ追加があると

しても、わずかの享受品の追加しかもたない、ことが見いだされるであろう」と述べる(Ricardo, *Principles* [Gonner ed.], p. 11. *Principles* [Sraffa ed.], p. 16. 邦訳, 18ページ。)。ここでもまた異存はないであろう。ところがリカードウはその次に、「そうしてみると、アダム・スミスとともに『労働はより大きな分量の財貨を購買することあればより小さい分量の財貨を購買することであろうがその場合、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではない』と言うのは、けっして正しくない」と述べるのであった(Ricardo, *Principles* [Gonner ed.], p. 11. *Principles* [Sraffa ed.], p. 16. 邦訳, 19ページ。傍点の付されている箇所はリカードウの原文においてイタリック体にされている箇所。)。ここではリカードウは、「購買する」という言葉を、労働者が彼の賃金でもって買う財貨ということについて述べるために使用している。だがスミスはそこではその言葉を、扱いにくい自然から財貨を購買する——ただし、労働者自身が享受するのはそれらの財貨の一部分にすぎない——のに必要な労苦と骨折り、あるいは人時(man-time, 延べ労働時間)ということについて述べるために使用していたのであり、リカードウは誤った解釈をしているのである。Bladen [1975], pp. 372-373.

- (46) なおブレイドゥンによれば、リカードウはある所与の量の労働がくりひろげられる時間というそういった時間における諸相違の影響というものを探究することを欲したため、リカードウはこのことをはっきりと述べた、とされる。Bladen [1975], p. 373.

- (47) ブレイドゥンはつぎのような説明を加えている。すなわち、スミスは銀に関連して、アメリカの豊富な諸鉱山の発見後「それらの金属類を鉱山から市場へもたらすのに費やす労働がいっそう少なくなったので、それらの金属類が市場へもたらされたときに、購買しまたは支配できた労働もいっそう少なくなった」ということを、主張したのであるが(*W. N.*, p. 32. 大河内訳<1>, 57ページ。), ここでもつぎのことに注意しておくことが必要である。すなわち、異時点間での現実価格における諸変化と労働支配力における諸変化との間のあるおおよその相関関係という推定は、ある所与の時点での均衡価値についてのある単純な労働説の受容ということを暗に意味しているわけではなく、またその推定は、なんらかの機械的な関係ということを暗に意味しているわけでもない、ということである。スミスは、その関係は変化する供給ということに依存するということをよく知っていたのであり、さらに彼は『国富論』第1篇第11章において、需要における諸変化を検討し、そして、相対的金供給の理論——グスタフ・カッセル(Gustav Cassel)によってある統計的および図表的説明が与えられることとなる一理論[Gustav Cassel, *The Theory of Social Economy*, trans. Joseph McCabe, 2 vols. (London: T. Fisher Unwin, 1923)——邦訳としては、大野信三訳『社会経済学原

論』(岩波書店, 1926年)がある——vol. 2, bk. 3, chap. 11 を参照せよ。] ——を
展開したのであったのである。Bladen [1975], p. 373.

- (48) このことについてブレイドゥンはつぎのような説明をなしている。すなわち、
スミスのこういった主張は弁護できるものではない。スミスはこの主張の根拠を、
穀物での地代を貨幣での地代に切り替えたオックスフォードの諸カレッジの購買
力はひどく低下したという証拠に置いた。さらにまたスミスは、農業における諸
改良は「農業の主要な用具」である家畜の価格の増大によってほぼ相殺されると
いうことを主張して、長期の諸期間にわたっての穀物生産費の恒常性ということ
に一つの理論的根拠を添加した。だが、こういったものは非常に説得力のあるも
のというわけではない。さらにまたスミスは、穀物は主要賃金財であるからまた
実質賃金はおおむね一定であるから、穀物はつねに同一量の労働を支配するであ
ろう、と主張した。だがここでは、「支配する (command)」ということは「雇う
(hire)」こと、「雇用する (employ)」ことを意味しているのであって、それは本来
スミスが「支配する」という言葉によって意味していたものと非常に異なったも
のなのである。Bladen [1975], p. 373. Bladen [1975], p. 370, 前稿の注2およ
びII. (2). ⑤も見よ。

- (49) Bladen [1975], p. 373.

- (50) Charles Gide and Charles Rist, *A History of Economic Doctrines: From the Time
of the Physiocrats to the Present Day*, trans. R. Richard, 2nd English ed. (Boston:
D. C. Heath & Co., n. d.) くだし、ブレイドゥン自身はフランス語版第2版
(1913年)の英訳である英語版第1版(1915年)を使用している。本稿で使用する
英語版第2版は、フランス語版第2版の最初の英訳に基づきつつフランス語版
第6版および第7版でなされた修正および追加を組み入れたものである。なお、
フランス語原本の第1版の出版年度は1909年。> ——以下、Gide & Rist [1909]
と略記する——。宮川貞一郎訳『経済学説史』(上, 下)(東京堂, 1943年)。

- (51) ブレイドゥンは、上述のジードとリストの共著からつぎのような文章を引用し
ている。「前においては、『真実』価格は労働に基礎を置く価格を意味しているの
であった。今は、『自然』価格が、その生産費で評価される財貨の価格として定
義されている。名前の変更は大きな意味を持たない。スミスがその双方において
追求していたものは、市場価格の変動の背後につねに隠れているあの真の価値で
あった。それは同一の問題である、しかし新しい解答が与えられているのである。」
(Gide & Rist [1909], pp. 94-95. 邦訳〈上〉, 111ページ。) Bladen [1975], p. 374.

- (52) Bladen [1975], p. 374. なお、ブレイドゥンは、真実価格と交換価値との間の
違い、言い換えれば、安価さということ (cheapness) の二つの意味の間の違いは、
賃金について論じられる『国富論』第1篇第8章のはじめのほうで明らかにされ
ているとして、そこでのスミスのつぎのような文章を引用している。「たとえば、

大多数の職業において労働の生産力が10倍に増進したと……仮定しよう。だが他方、ある特定の職業では労働の生産力が2倍にしか増進しなかったと……仮定しよう。大多数の職業における1日分の労働の生産物を、この特定の職業における1日分の生産物と交換するにあたっては、前者における所産 (work) のもとの量の10倍量は、後者における所産のもとの量の2倍量しか購買しないことになるであろう。後者のある特定量は……、まえより5倍も高価になっているようにみえるであろう。けれども実は、それは2倍だけ安価になっているはずなのである。なるほど、それを購買するのに5倍の量の他の財貨が必要になったとはいえ、それを購買するのにも生産するのにも、わずか半分の量の労働しか必要としないであろう。」(W. N., pp. 64-65. 大河内訳〈I〉, 110-111ページ。) Bladen [1975], p. 374.

そしてまたブレイドゥンは、うえの『国富論』からの引用文に関連づけて、つぎのような内容の指摘をなしている。すなわち、それが正確に5倍も多くの他のものと交換されるであろうと考えることには、たしかに疑念はある、しかしだからといって、安価さということの二つの意味の間の違いを認めてはならないというわけでも、また、交換価値はたとえ正確にはなくてもおおよそのところではそこで考えられているようなパターンにそって変化するであろうということを認めてはならないというわけでもない。Bladen [1975], p. 374.

さらにまたブレイドゥンは、彼のみるところでは「真実価格」の問題と区別されるべき問題である「自然価格」、自然価値の問題、ある所与の時点での市場における均衡価格の決定ということについてのスミスの議論に関連して、つぎのような内容の指摘をなす。すなわち、ジイドとリストの共著では、「〔価値の問題にたいする〕二つの異なるしかし同じように誤った解答が、彼によってつぎつぎに採用された、しかし彼は、それらのうちのいずれのものをとるかということをけっして実際に決定しはしなかった」とされているが (Gide & Rist [1909], p. 93. 邦訳〈上〉, 108-109ページ。〔 〕内はブレイドゥン。), そこでは「労働」説 (the 'labour' theory) と「生産費」説 (the 'cost-of-production' theory) のことが言われているのであろう。ところで、スミスはその「労働」説を狩猟民族という状況に限定したのであるが、そのような1投入物モデルでは、これは誤ったものではない。たしかにそのようなモデル自体は、経済学教育を行うさいにおける有用性ということを別とすれば、非常に有用なモデルというわけではないが、その理論自体は正しいのである。また、その生産費説も、生産費一定という状況のもとでは、誤ったものではない。それは、需要を無視しているのではなく、産出にたいする費用といったものの変動ということを無視している。だが、こういったものがいかに非現実的なものであるとしても、費用一定のケースというものは完全競争および特殊均衡分析に適した唯一のものであるというピーエロ・スラッファ

(Piero Sraffa) の見解を想起してみるべきである。Bladen [1975], p. 374.

- (53) Ronald L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, 2nd ed. (London: Lawrence & Wishart, 1973; 1st ed., 1956)——以下、Meek [1956] と略記する、ただし、ブレイドウン自身は1956年の初版を使用している——, p. 79 (水田 洋, 宮本義男訳『労働価値論史研究』〈初版の訳〉〈日本評論新社, 1957年〉, 91ページ) を参照せよ。
- (54) ブレイドウンによれば、リカードも、労働が費やされる期間がすべての産業において同一であるといった単純なモデル以外についてはそうしたのであり、またマルクスも、「資本の有機的構成がすべての産業において同一である」といった単純なモデル以外についてはそうしたのである、とされる。Bladen [1975], p. 375.
- (55) Meek [1956], p. 79 (邦訳, 91ページ) を参照せよ。
- (56) Meek [1956], pp. 79-80 (邦訳, 91ページ) を参照せよ。
- (57) Bladen [1975], pp. 374-375. なお、ブレイドウンによれば、労働価値説 (the labour theory of value) [ある所与の時点での市場における長期的あるいは均衡的諸価値の決定についての一説明という意味での労働説] に激しく反対したジェヴォンズ (W. S. Jevons) やメンガー (C. Menger) も、彼らの各々の資本理論のなかに労働説 (ミークの言う意味での労働説) を存続させたのである、とされる。Bladen [1975], p. 375.

V. W. ブレイドウン(1975)についての覚書：結びに代えて

本稿と前稿との2回にわたって、「アダム・スミスの価値尺度論」に関連をもつ諸研究の個々の内容を整理する試みの一部として、もともとは1975年に公表されたV. W. ブレイドウンの一論文のなかで示されているブレイドウンの所論の内容をみてきたのであるが、以下において、その2回にわたってみられてきたブレイドウンの所論の要点、特徴等に関して、若干の点を示しておくこととする。

まず、ブレイドウンによれば、スミス（さらに経済学の古典期の終わりのマルクスを含めて一般に古典派の経済学者）は、経済プロセスを、人々が仕事をしているとともに他人の仕事を支配しているプロセスとしてみていたのであり、そして、スミスのいう「労働にたいする支配力」とは、資本家が雇うことのできる労働の量というよりも、その雇用という点では

なんの役割をも演じはしないとしても人が、その生産物を享受することのできる労働の量（それだけの量の労働がどのように雇用されようと）のことをいっていたのであり、それは、「労働にたいする支配力」であって「諸商品にたいする購買力」ではないのであり、したがってまた、スミスのいう「労働にたいする支配力」という考えを、諸商品にたいする購買力を測定する一つの間接的な方法を示すものと解釈するのは誤りである、とされるのであった。

他方、スミスは彼のいう事物の「真の値うち」というものはその事物の「労働にたいする支配力」によって示されるとしたとみるブレイドゥンによれば、スミスのいう「労働にたいする支配力」を、個人もしくは個人集団の貨幣タームでの所得、さらに、財・サービスのタームでの所得といったものをこえての、個人もしくは個人集団の「実質所得」といったものに到達するための一つの方向と考えることはできる、とされつつも、同時にまたブレイドゥンによれば、一社会あるいは一国全体としてみた場合、その社会あるいは国が全体として支配しうる労働量とは、その社会あるいは国の全体としての生産物の量にかかわりなく、その社会あるいは国に実際に存在している労働量そのものであり、したがって、「労働にたいする支配力」を総社会的所得、国民分配分、国民総生産等々およびそれらのものの経時的変化を測定するための尺度とすることは無意味なことであり、またスミス自身もそのようなことを考えていたわけではなかったのであってスミスのいう「労働にたいする支配力」をそのようなものとして解釈することはスミスの議論を誤解するものである、とされるのであった。

また、一国に実際に存在している労働量そのものがその国が全体として支配しうる労働量であるとともにそれだけの労働量が全体としてのその国の生産活動に投入されるべき利用可能な労働量なのであって、その生産活動によって生産される生産物の量にはかかわりなくその国が全体として支配しうる労働量したがってまた生産活動に投入されうる労働量そのものはその国に実際に存在している労働量である、とみるブレイドゥンによれば、

一国の生産物が支配しうる労働量が一国の生産物の生産に投入される労働量なのであり、そしてその労働量はその国に実際に存在している労働量なのであって、そこにおける蓄積の問題とは、資本家階級によって支配される労働の量がどれほどであるか、また、その労働が贅沢よりもむしろ蓄積に向けられるかということなのである、ととらえられ、スミスは一国の生産物が支配しうる労働量が一国のその生産物の生産に要する労働量を超えるその大きさ、その差がその国のなしうる蓄積の額の尺度となると考えた。とみる見解は、スミスの議論についての適切な解釈を提供するものではないとともに蓄積についてのそのような考え自体も意味をなすものではない、とみられるのであった。

さらにまた、いまみられたことと関連するのであるがブレイドウンの示す論理によれば、その住民が労働者階級と資本家階級および地主階級とからなるようなある国の一国全体としての生産物とは、労働者階級の支配しうる労働量と資本家階級および地主階級の支配しうる労働量との合計であるその国に実際に存在しその国の全体としての生産活動に投入される量の労働の生産物であるのであり、その生産物の量そのものにはかかわりなくその生産物に「体化された」労働の量はその国に実際に存在する労働の量であるとともにその国に実際に存在するそれだけの労働量がその生産物によって「支配される」労働量ということになるとともに、それだけの量の労働が体化されているその一国の生産物が労働者階級と資本家階級および地主階級とによって享受されるその割合は、その国に実際に存在するそれだけの量の労働にたいしてそれらの階級がもつ支配力の割合に応じて決まる、ということになるのであって、うえのような住民の構成をもつ経済では国民分配分によって「支配される」労働の量は、利潤および地代の形で支払われる分配分の程度だけ、その国民分配分の生産に投入された労働の量を超過するといった考えそのものは意味をなさないもの、ということになるのであった。そしてまたブレイドウンによれば、スミス自身もそのような考えを提示していたわけではないのであって、そのような考えをスミ

スのものとするのは誤りである、とされるときにも、スミスにとってはむしろ、そうした実際に存在し・支配することができ・生産に投入することができる労働の生産性の向上、その結果として生じる富の増進ということこそが重要であったのであり、またそれゆえ、それらの労働の生産性における諸変化をどのようにして測定するかということが、スミスにとっての一つの重要な問題となったのである、とみられるのであった。

なお、ブレイドゥンによれば、このようにスミスはそういった生産性の向上、その結果として生じる富の増進ということに関心をいだき、生産性の変化の測定という問題に立ち向かったのであるが、そのさいスミスは事実上、一社会あるいは一国全体における生産性というよりも個々の商品生産部門における生産性の諸変化ということの問題にしようとしたのであり、しかもそれらの諸変化は彼のいう商品の「真実価格」というものにおける諸変化に反映されるとみることによって、事実上その生産性における諸変化の測定という問題を「真実価格」における諸変化の測定の問題という形で表した、すなわち、スミスの議論においては、個々の事物の「真実価格」はその各々の事物を獲得するための労苦と骨折りとして定義され、事実上、生産性の向上は「真実価格」の低下としてとらえられることとなっている、とみられるとともに、さらに、技術改良につれての諸事物のこの諸真実価格の削減ということこそがスミスの議論における富の増進（われわれの欲求充足度の向上）の主要原因であったのであり、資源配分の改善ということよりもむしろこのことこそがスミスの主要関心事であったのである、とされるのであった。

そして、たとえある特定時点でのそのようなものとして定義されるある商品の真実価格といったもののものを正確に測定することはできないとしてもその真実価格の経時的な諸変化といったものは少なくともおおよそのところでは測定されうるであろうとスミスは考えていたとみるブレイドゥンはさらに、スミスの議論における「諸真実価格における諸変化の測定」ということに関して彼の所説を展開するのであった。

そしてそこでのブレイドダウンの議論の示すところによれば、スミスはうえてみたように事物の「真実価格」を、それを獲得するための労苦と骨折り、こんにちで言う「不効用」、として定義するのであり、そして実際にそのような「労苦と骨折り」（不効用）といったものを直接的に測定するのかといえそこには確かに問題はあるのであるが、スミスの議論を正しく理解するためには、スミスはそこでは不効用（「労苦と骨折り」）そのものについての正確な尺度を追求していたのではなくて、不効用における諸変化のおおよその指標を求めていたのであり、そしてスミスはまずその指標を人時（man-time, 延べ労働時間, 労働量）における諸変化に求めようとした、すなわちスミスはまず、事物の真実価格（その事物を獲得するための労苦と骨折り）の諸変化のおおよその指標として、その事物を獲得するための労働量つまりその事物の生産に要する労働量（労働投入量）における諸変化を使用しようとしたのだ、と解されるべきである、ということになるのであった。

また、そこでのブレイドダウンの議論の示すところによれば、このようにスミスは事物の真実価格の諸変化のおおよその指標としてまず、当該事物の生産に要する労働量における諸変化といったものを使用しようとしたのであるが、その場合には、直接労働および間接労働の量そのものが労働投入量として計算されなければならない、しかしながら他方で、そのような計算を可能にする労働投入量タームでの計算書の欠如、したがって、労働投入量そのものの確定の不可能性、したがってまた、労働投入量の諸変化の確定の不可能性、それゆえまた、真実価格の諸変化のおおよその指標を提供することの不可能性、といった事情からスミスは、異時点間での、真実価格の諸変化・労働投入量における諸変化と、労働支配力における諸変化とは、おおよそ比例するというおおよその相関関係を推定し、異時点間での真実価格の諸変化のおおよその指標として、労働支配力における諸変化を使用しようとする事となった、と解されるべきである、ということになるのであった。

さらにまたそこでのブレイドウンの議論の示すところによれば、もしも労働投入量さらに労働支配力といったものそれ自体を正確に確定しようとするならばそのときには異質労働の問題という問題も解決しなければならないということになるのであり、そしてたしかにそのような問題自体にたいしてはスミスの言うような「市場のかけひきや交渉」といったものは真に満足のいく解決を提供しうるものではない、しかしながらスミスはそこでは「真実価格」における諸変化の測定ということを取り扱い、その諸変化のおおよその指標をまず労働投入量における諸変化に、さらに、労働支配力における諸変化に、求めようとしていたのであったということに留意すべきであり、そして事実、もしわれわれもスミスと同様に労働投入量における諸変化さらに支配労働量における諸変化といったものをそのようなおおよその指標として用いようとするならば、そのときには、われわれは、平均的労働者といったものを想定しても、様々な熟練をもった労働者たちの平均的かせぎ高に従ってウエイトづけられるそれらの労働者たちによって費やされる時間数といったものをもって労働投入量としても、平均的労働にたいする支配力といったものをもって「労働支配力」としても、さしつかえはないであろう、ということになるのであった。

なお、ブレイドウンはこのように、スミスの議論では「真実価格」における諸変化のおおよその指標として労働投入量における諸変化、さらに、先でみた脈絡で労働支配力における諸変化といったものが考えられていたとみ、さらに事実そのような労働支配力における諸変化といったものはスミスのいうような「真実価格」といったものの諸変化についての一つの有用なおおよその指標を提供しうるものではあるとみるのであるが同時にまたそこでのブレイドウンの議論の示すところによれば、たとえおおよその指標としてであれそのような指標として労働支配力における諸変化といったものを使用するためには労働支配力およびその諸変化そのものを確定しなければならず、そしてそのためには、たとえ異質労働の問題はうえてみられたような形で克服しうるとしてもそれにくわえて、諸賃金率につい

ての史的統計というものが必要となるのであるが、そのような諸賃金率についての十分な史的統計の欠如、したがって労働支配力およびその諸変化を確定することの困難性といった事情をうけてスミスは、事物の労働支配力における諸変化とかなり安定的な割合を保ちつつ推移する事物の穀物価格での諸変化つまり、事物の穀物支配力における諸変化が、事物の労働支配力における諸変化にたいするかなり近い近似値を提供する、と主張したのであり、そしてたしかにそのスミスの主張、それを根拠づけるためのスミスの議論は十分な妥当性をそなえたものではなかったのであるがスミスがそこで論じていたのは真実価格における諸変化のおおよその指標としての、労働支配力における諸変化さらに穀物支配力における諸変化ということであったということ自体は忘れられてはならないのであって、スミスはそこではわれわれの言う意味での貨幣の購買力の変化といったものを研究していたわけでも諸指数のウェイトづけということに関するこんにちのわれわれの諸問題を取り扱っていたわけでもなく、うえてみた意味での「真実価格」における諸変化、事実上、その向上が富の増進の主要原因であるとスミスが考えるところの生産性における諸変化、といったことに関する問題を取り扱っていたのである、ということになるのであった。

また、ブレイドウンによれば、そのような真実価格の観点からの議論においてはスミスは諸真実価格における差異を伴った諸変化が市場での諸価格——スミスのいう諸自然価格すなわち諸均衡価格といったものをも含めて——に及ぼす影響といったことに殊更関心をいだいていたわけでも、また、真実価格の低下つまり生産性の向上が、実質賃金にあるいはまた平均的労働者のもつ労働支配力に及ぼす効果といったようなことそのものについて明示的に何事かを述べたわけでもない、とされるときに、さらにまた、スミスのその議論には、労働がなんらかの特別な意味で「生産的」なものでありまたそれゆえ土地や機械類等々の果たす貢献というものは無視できるとか、さらに、労働が論理上その労働の全生産物にたいする請求権をもつことになるのだとかいったようなことを示唆するものは何も含まれ

てはないのであって、それどころかスミスは労働の生産性そのものは環境の質や自由に使用できる資本設備の量と質等々といったものに依存するとみていたのである、とされるのであった。

他方、この覚書の初めのほうでも触れられたように、ブレイドゥンは、スミスの議論のなかには「労働支配力」としての個人もしくは個人集団の真の所得といった考え、さらに、「労働支配力」によって示されるものとしての事物の「真の値うち」といった考えがある、とみているのであり、その意味でブレイドゥンは事実上、スミスの議論では「労働支配力」における経時的な諸変化はスミスのいう「真実価格」における経時的な諸変化についてのおおよその指標を提供するものと考えられているとともに、「労働支配力」およびその経時的な諸変化はスミスのいう「真の値うち」およびその経時的な諸変化を指し示す一つの尺度といった意味合いも担わされているとみている、ともいえるのであるが——なお、前稿と本稿とで取り扱われているブレイドゥンの論文においては、ブレイドゥンは、スミスのいう「真実価格」もスミスのいう「真の値うち」もともにスミスのいう意味での「価値」、とするのであった——、同時にまたブレイドゥンの議論によれば、「真実価格」〔また、「真の値うち」〕に関するそのような測定の問題と、市場における商品価値の決定因、市場での商品価値の決定についての因果的説明の問題とは、もともと別個の問題であるはずのものであって、スミスもそれらを混同していたわけではないのであり、また、スミスの議論では「労働支配力」はうえのような測定の問題にかかわるものではあっても価値の決定因、価値決定の因果的説明の問題といったことにかかわるものではない、ということになるのであった。そして、このような見方をとるブレイドゥンは、スミスが市場での商品価値の決定についての投下労働量による因果的説明と支配労働量による因果的説明との両方を提示したと解するのは誤りである、とするとともに、スミスが商品の生産に投下された労働量とその商品が市場において支配しうる労働量とを同じことを表すものとして取り扱ったとするのも誤りである、とするのであっ

た。さらにまたブレイドゥンは、スミスが彼のいう「自然価格」の問題を議論するときにもそこではある所与の時点での市場における諸商品の均衡的な諸価値の決定、資源配分ということと結びついた均衡的な諸価格の決定、といったことについての因果的説明ということが取り扱われているのであり、そこで取り扱われている問題は、「真実価格」についてのスミスの議論で取り扱われている問題すなわち諸事物がヨリ安価になってきたかどうか、つまり、「手に入れるのが」ヨリ容易になってきたかどうかという史的な問題とは別の問題であるのであって、スミスが「真実価格」について論じるときも「自然価格」について論じるときにもそこで取り扱われている問題自体は同一の問題であったという解釈は誤りであるのであり、事実スミス自身もある所与の時点での市場における均衡的な諸価値、諸均衡価格の決定ということそのものに関しては、「真実価格」についての議論とは別に、狩猟民族の状況という1投入物モデルについては〔投下〕労働〔価値〕説 (the labour theory), 投入物として労働にくわえて他の要素が考慮に入れられるモデルについては生産費説でもって因果的説明を与えようとしていたのである、とみるのであった。

ただし、スミスさらに経済学の古典期の終わりのマルクスを含めて一般に古典派の経済学者は経済プロセスを、人々が仕事をしているとともに他人の仕事を支配しているプロセスとしてみていたと考えるブレイドゥンによれば、もし「労働説 (the labour theory)」というものが、ある所与の時点での市場における均衡的諸価値の決定についての因果的な一説明を提供するものというよりもむしろ、生産の領域で人々が相互にむすぶ基本的諸関係が交換の領域において彼らが入る諸関係を究極的に決定するのでありそしてそこでは原理的には生産物の交換があるのではなく生産に協働した労働の交換があるのだといった内容のことを意味するものと解されるならば、そのときにはすべての古典派経済学者は労働説論者であったということになるのであり、そしてまたこういった脈絡においてのみ、彼らは理解されることができるのである、とされるのであった。